

名古屋女子大学 紀要 55 (人・社) 239～247 2009
〈研究ノート〉

障がいを理解するための「絵本」制作の試み (第3報)

－保育所における障がい児の実態について－

平林 あゆ子

Making a Picture Book to Promote Understanding of Children with Disabilities (Ⅲ): Investigation into the Actual Conditions of Children with Disabilities in a Day Nursery

Ayuko HIRABAYASHI

1. はじめに (問題と目的)

2006年12月に国連で採択された「障害者の権利に関する条約 (障害者権利条約)」の教育条項は誰をも排除しない教育制度、インクルーシブ教育を原則としている。これまでも、それらの理念を推進するにあたり、障がい児への個別支援ばかりか、障がい児を取り巻く環境調整、さらに環境調整には当事者の意見が反映されることが重要であると提言されてきた (山中, 2008)¹。こういった一連の流れに沿って、保育の場で障がいのある子どもへの対応が、インクルーシブ保育の理念に照らして適切なものになっているかという問いかけがされ、理念の実現に向けて実行される必要がある。

教育界では、特別支援教育の取り組みが2007年4月から始まった。保育所、幼稚園、地域の学童クラブ等においても、「共に生きる」というインクルーシブ保育の理念の浸透や障害児加配 (障害児の人数により保育士を園にプラス配置) 等の施策とも相まって、障がいをもつ子どもと健常児との接点が増加しつつある。このような状況から障がい児と健常児の相互理解の工夫が切に求められている。そこで、インクルーシブ保育の促しのため、幼児の障がい理解教育に有効なツールとして「絵本」の制作を試みてきた。

本稿では、研究の進展に必要と思われる基礎的な資料として、保育所における障がい児の実態について調査し考察したので報告する。

2. 保育所における障がい児の実態

「障がいを理解するための絵本」 (以後「絵本」と記す) は、子ども全体に活用されること、特に障がい児の周辺に有効活用されることを願っている。それに関連して、そもそも就学前の障がい児が保育所にはどれほど通園しているのだろうか。厚生労働省は1974年度より保育所に障がい児の受け入れを促進するため保育士を加配する事業をすすめ、2003年度からは市町村の事業において、広く実施されるようになった。そして、障がい児保育を実施する保育所数は年々増加²している。(1) 保育所にどのような障がい児がどのくらいの割合で在園しているのか、(2) 各園での障がい児の対応はどのようにされているのか等実態の把握が重要と

思われる。

2. 1 方法

保育所にいる障がい児の実態調査は公的にも行われているが、数的な統計が重点で現場の具体的な実状といった詳しい内容までは分らない。また、保育所への質問紙の郵送により把握しようとしても、個人情報保護などの点からも、ありのままの実態を解明するのは大変難しいと思われる。そこで、筆者は2007年度に(1)保育所で学生が2週間の保育実習をする際に、障がい児の実態をよく観察するように依頼し、実習直後に質問紙を実施した。また、(2)保育実習中に筆者が指導訪問した際に、障がい児の実態について保育士から直接聴取したり、更に(3)障がい児保育ですぐれた実践を行っている保育所でのインタビューを実施した。そうして得た「保育所に在園している障がい児」についてのデータを分析し、考察した。

3. 結果

3. 1 調査した保育所の数と障がい児の在園率

調査対象の保育所は、2007年度 名古屋市とその周辺の県における保育所でA大学およびB短期大学の学生が保育実習をした保育所（2つの大学で重複する実習先については実数に戻した）で、合計132園である。地域別の内訳は下記のとおりである。

名古屋市	28 園	静岡県	4 園
愛知県（名古屋市を除く）	75 園	福井県	1 園
三重県	12 園	富山県	1 園
岐阜県	10 園	石川県	1 園

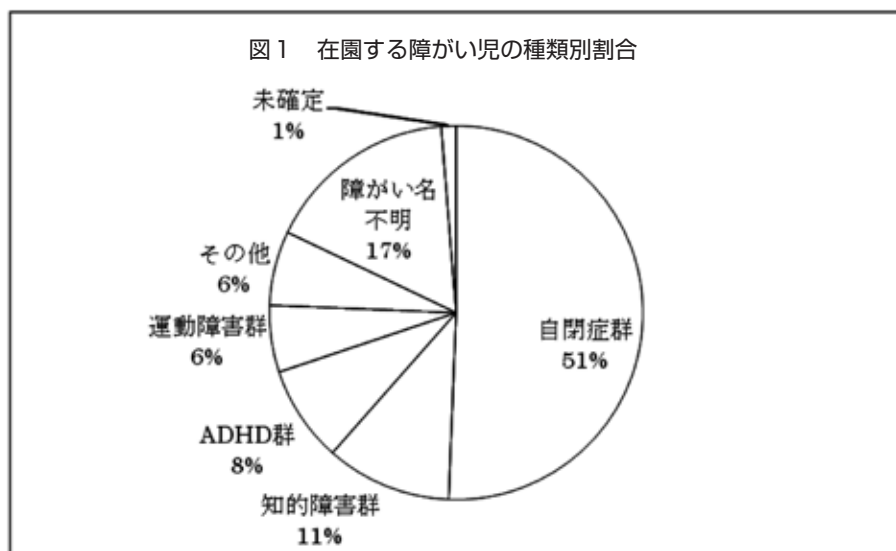
以上の132園の内、障がい児が在園している園は71園であった。これは、全体の53.8%と過半数を超えており、2園に1園は障がい児が在園しているという率であった。但しこの数値は、実習した学生が現場の保育士や園長から聴取した情報や確かに障がいはあるが障がい名は不明（データに記載）など、学生の判断も含めたものなのでその点は考慮する必要がある。

3. 2 保育所に在園する障がい児の数と障がいの種類

障がいの種別を大きく7つに分類し、内訳を含めて集計したものを表1に、種類別を図1に示した。

表1 在園する障がい児の種類別内訳

障がいの種類	内 訳 (人数)	計 (人)
自閉症群	自閉症 (66) 高機能広汎性発達障がい (2) 軽度発達障がい (2) アスペルガー障がい (9)	79
知的障がい群	ダウン症 (10) 知的障がい (6) 発達のおくれ (1)	17
ADHD 群	ADHD (10) 多動 (3)	13
運動障がい群	肢体不自由 (3) 脳性まひ (2) 運動発達障がい (1) 筋肉の病気 (1) 義足・下肢が不自由 (2)	9
その他	水頭症 (3) 視力低下 (1) 難聴 (1) 低出生体重児 (1) 奇形 (2) 重度のアレルギー (1) 睡眠障がい (1)	10
障がい名不明	障がい名は不明だが何らかの障がい (26)	26
未確定	確定診断待ち (2)	2
合計		156 人



3. 3 保育園における障がい児への対応について

(1) 観察された保育園での問題点

学生が2週間の実習中に観察した保育園での問題点について①保育者や周りの子どもの障がい児への接し方、②保育体制 に分けて整理した。

問題点の ①保育者や周りの子どもの障がい児への接し方を、さらに「拒否的態度、保育者の特別扱い、放任・配慮不足」の群に分け、②保育体制については、「障がいと障がい児についての知識・理解の不足、人手や人材不足、障がい理解教育の欠如」の群に分け表2に示した。

表2 観察された問題点

①保育者や周りの子どもの障がい児への接し方	②保育体制
<p>拒否的態度</p> <ul style="list-style-type: none"> ・周りの子どもが障がい児をからかっていた。 ・保育者が障がい児の前で悪口を言っていた。 <p>保育者の特別扱い</p> <ul style="list-style-type: none"> ・特別扱いで、甘やかす。 ・障がいのある子どもには「やさしい」、「かわいい」と言って特別扱いしている。 <p>保育者の放任・配慮不足</p> <ul style="list-style-type: none"> ・運動会の練習など障がい児だけ、隅っこで遊ぶ。 ・障がい児に目が届いていない。 ・放任している。 	<p>障がいと障がい児についての知識・理解の不足</p> <ul style="list-style-type: none"> ・障がいおよび障がい児について知識や理解が足りない。 ・保育者が子どもの行動が理解できなくて、適切に接することができない。 ・保育者等が、障がいのことを何も知らずに接している。 ・保育者も対応に困っていた。 <p>人手や人材不足</p> <ul style="list-style-type: none"> ・保育士が不足している ・子どもの人数が多く、障がい児ばかりにかまっていられない。 ・保育者の負担が大きい。 <p>障がい理解教育の欠如</p> <ul style="list-style-type: none"> ・他の子どもたちが障がい児といっしょは「イヤ」と言う。 ・他の子どもへ障がいについての考え方や障がい児への接し方を正しく教えていない。

（2）障がい児保育についての疑問点

学生が感じた子どもへの接し方についての疑問点について ①焦点の合わせ方、②援助の程度や叱り方、不可解な行動、③周りの子どもの障がい理解教育や障がい児の気持ち、 の群に分けて表3に示した。

表3 保育についての疑問点

① 焦点の合わせ方	② 援助の程度や叱り方、不可解な行動	③ 周りの子どもの障がい理解教育や障がい児の気持ち
<p>一斉保育の焦点をどこに合わせるか</p> <ul style="list-style-type: none"> ・他の子どもと一緒に保育する場合、障がい児のテンポに付き合うか、みんなのテンポに合わせるか。 	<p>援助の程度</p> <ul style="list-style-type: none"> ・どこまで手伝って良いのか、その子どもはどこまでできるのか、分らなかった。 ・他の子どもができて、障がいのある子どもだけができない場合、どのように接するか <p>叱り方</p> <ul style="list-style-type: none"> ・障がい児が間違った行動をした時、厳しく叱るべきか、優しく言うべきか。 <p>不可解な障がい児の行動</p> <ul style="list-style-type: none"> ・障がいのある子どもが奇声を出したり、急に怒りだすのはなぜか。 	<p>周りの子どもの障がい理解教育</p> <ul style="list-style-type: none"> ・子どもにどう障がいをどう受け入れてもらうか、障がいの知識がないと子どもたちが自分と違うことが分からないと思う。 ・友だちはできるのか、子どもたちはその障がい理解ができているのか。 <p>周りの子どもや障がい児の気持ち</p> <ul style="list-style-type: none"> ・障がいのある子どもに一人の保育者がつきっきりだったので、他の子どもはどういう気持ちなのだろうかと思った。 ・子どもたちがどんどん成長していく中、障がいのある子どもはついていけず、自信をなくしてしまうのではないか。

（３）保育園で配慮されていたこと

保育園で配慮されていたことについて ①保育者を適切に障がい児に付ける、②適切な保育や対応の工夫、③バリアフリーの設備と特別な部屋の設定 の群に分けて表４に示した。

表４ 保育園で配慮されていたこと

① 保育者を適切に障がい児に付ける	① 適切な保育や対応の工夫	② バリアフリーの設備と特別な部屋の設定
<ul style="list-style-type: none"> ・保育者が障がい児につく ・クラスに保育士が２人いる ・目の届くところに保育者がいる 	<ul style="list-style-type: none"> ・低年齢クラスへの所属 ・スーパーバイザー制をとり意見交換されていた ・個別の週案を工夫 ・他の子どもと変わりなく接する ・他の子どもと同じように過ごせるように支援する ・対応の仕方を理解して保育 	<ul style="list-style-type: none"> ・スロープが付けられていた ・段差がない ・落ち着ける部屋があった

３．４ 障がい児保育の優れた実践例

「障碍^{注(1)}児保育」を30年継続し、優れた保育が実践されている島根県安来市切川保育所を訪問し、園長（佐野真理子氏）から指導法や理念を拝聴した。佐野氏は『障碍児保育・30年』^{3 注(2)}の著者の一人である。「他の子どもたちが障がい児といっしょでは「イヤ」と言って拒否する」という問題点に対し、2時間のインタビューを行い対応を探った。周りの子どもの「障がい児といっしょはいやだという思い」は保育者の思いや周囲の大人や社会を反映しているものであるという。保育者の思いがどこにあるかが大切であり、子どもの思いを汲んで丁寧な関わりができてくるかが反映されてくるものだというのであった。子どもを肯定する保育者の気持ちの中核となり、そういった思いが周囲にじわじわと波及し、気持ちの豊かな暮らしに変化していくというのが佐野園長の持論であった。

例えば、A児（障がい児）がB児の積み木遊びをしているところを直進し、B児の積み木を壊してしまうできごとがあった。積み木をこわされたB児は怒り泣く。そんなA児の行動に対し「いけません」と否定するだけで解決するのではなくて、子どもの思いを汲んで関わること。そこを通りたかったA児の思いと積み木を完成したかったB児の双方の気持ちの理解があって保育者が関わる。そうすることにより、周りの子どもに保育者の思いがどこにあるかが次第に伝わり、A児との関わり方を覚えていき、「A児と一緒にイヤ」という発言は出てこなくなる。最終的には、周囲がA児を応援するようになる。

注(1) 鯨岡ら（2005）は、従来表記されてきた「障害」を「障碍」と表記している。「碍」は石が行く手を邪魔しているという意味で、「害」よりもふさわしいと思ったからだと述べている。筆者は先の名古屋女子大学紀要第54号で記したように、議論はあるがより良い表現として「害」は「がい」とし、法律用語等以外は「障がい」とした。

注(2) 第43回（2006年）保育学会文献賞受賞

4. 考察

（１）厚生労働省の調査によると、障がい児保育の保育所での実施状況推移において、平成18年度では全保育所数の31.4%の保育所で実施していることを示している。この数値は特別児童扶養手当支給対象児童数で算定しており、確定診断のある子どもたちのいる保育所の割合である。判断が難しいボーダーラインの子どもの居る保育所の割合は24.0%であり、合計すると55.4%の保育所で、障がい児保育を実施していることを示している。⁴ この数値は、本稿の調査対象とした障がい児が在園する保育所の割合53.8%とほぼ一致する結果であった。

（２）本調査で対象になった156人の図1「在園する障がい児の種類別割合」において、自閉症群が目立っており全体の51%にも達する。ADHD群も含めると、約60%で主に発達障がい児が保育所に在園することが分かった。文部科学省（1999,2005）の定義する軽度発達障害は、これらの障がいに加えLD（学習障害）を挙げているが、LDがあがってこないのは、保育の場に文字や数字の学習の場としては必須ではないため、目立った障がいとして取り上げられないということもあろう。肢体不自由のように外面上は目立った障がいではない発達障がい児が主に保育所で共に保育を受けていることが分かる。

（３）図1「在園する障がい児の種類別割合」において、「障がい名不明」「その他」「未確定」については、園児が低年齢のため診断がつけにくい場合や小児神経専門医の不足で診断機会を長い時間待たねばならない場合、保護者が障がいを認めたがらない場合、境界線の場合などが考えられる。

（４）学生が実習中に観察した障がい児への対応として挙げた問題点は、全体の保育の中の一部で判断するため、一面的で表層的に捉えている場合もあり、保育士の真意を把握しきれていない可能性がある。しかし、実際に観察した問題点から修正したほうが良い点や、改善すべき点も含まれていると思われる。

（５）様々な問題点、疑問点があげられたが、これらへの対応方法として ①保育者の障がい児への人員配置の適正化 ②保育者の障がい児への接し方の改善や保育方法の充実 ③保育者の障がいについての知識理解の深化 ④周りの子どもの障がい理解教育の必要性 という4点に集約して考察し改善点を探ってみた。

- ① 人員配置の改善については、障がいの確定診断をすすめ、保育者の加配事業を拡充する必要がある。しかし、幼児期は保護者が子どもの障がいを受けとめることに大変抵抗のある時期であることが筆者の臨床経験からも推察でき、必ずしも確定診断の促しは容易ではない。その様な際に専門家との連携などが重要な鍵となる。
- ② 保育方法に関しては個々の子どもの障がい特徴や性格をよく把握し、個々の子どもに合った援助が必要である。そのためには、
- ③ 保育者の障がいについての知識理解を深化させることが肝要であり、保育士養成のカリキュラム編成において、授業科目「障害児保育」、「発達障害論（本学での名称）」などの指導内容の充実と、例えば現在は保育士資格取得の際には選択科目となっている「発達障害論」の授業内容の必須科目化を図ることも改善策と考えられる。

- ④ 周りの子どもへの障がい理解教育の必要性がこの調査で特に浮き彫りにされた。「他の子どもたちが障がい児といっしょでは「イヤ」と言って拒否したり、他の子どもへ障がいについての考え方や障がい児への接し方を正しく教えていない」という記述にみられるように、単に子ども達が共に在り関わるだけではなく、「そこに偏見を取り除き理解を促す方策が重要（J.Donaldson,1980⁵；山本・桐原・徳田,1997）⁶」であることが認識できる。

（6）保育園で配慮されていたことは、①保育者を適切に障がい児に付ける、②適切な保育や対応の工夫、③バリアフリーの建物の設備と特別な部屋の設定といった条件を備えた園もみられ、子どもに合わせた支援が必要であることはいうまでもない。障がい児を受け入れるために、前もってスロープを敷設したり部屋の増設を行ったという保育所など筆者の過去の実習における指導訪問で経験した。

障がい児に付く保育士は、例えば島根県安来市では障害児保育専任保育士⁷という立場で、幾つかの保育所の保育サポート役を担っており、そういったスタッフを設けるのも良い対応と思われる。

（7）対応方法として（6）の園で配慮されていた点も含め（5）の考察以外に、例えば肢体不自由児などの受け入れを考えると、園の建物のバリアフリー化、発達障がい児には一旦落ち着かせるための特別の部屋を設けるなど、環境にも配慮が必要な場合が生じる。しかしその配慮の程度がとても微妙であることが病院での筆者の障がい児支援の際の保護者の訴えからみえる。「C園ではてんかんの子どもの水泳は危険だからと、目立つように黄色い帽子をその子どもにかぶせた。危険は回避できたが、目立った存在となり他の子どもの親から一緒に教育は無理だと、その子を排除するような訴えが出た」という。このことから子どもの背景にある保護者らの障がい理解教育が必要と思われた。

（8）安来市の切川保育所を訪問し、障害児保育を長年継続されてきた佐野氏の意見を確認できたのは貴重であった。先のインタビューにおいても述べられていたように子どもの存在を肯定する保育者の思い、ひいては人間理解がインクルーシブ保育の大切な中核となるのであろう。佐野氏は筆者が実行している幼児の障がい理解のツールとして「絵本」を制作して読みきかせることについて、視覚的に入りやすく、子ども同士の理解を助けるのに有効なツールとなると肯定的であった。

5. 結び

保育の場において、障がいのある子どもへの対応がインクルーシブ教育の理念に照らして適切なものになっているか、学生の実習後の質問紙の回答と筆者の保育所でのインタビューや筆者のコミュニケーション障がい児への相談支援から得た知見、障害白書などの資料から検討した。

障がいのある子どもが保育所にいることが普通になりつつある今日、その対応は必ずしも充分とはいえない現状と思われる。しかし現場の園長や保育者のみなさんは、多忙の中を精一杯

の努力をされており、頭の下がる思いである。障がい児保育をはじめとし、行政的にも色々な施策がされてきているが、体制面、設備面の一層の支援を望む次第である。保育者側の障がいに対する知識・理解についても、自己研鑽はもちろん保護者も含めて保育所全体としての取り組みや、障がい児の背景まで配慮する深い共通理解に基づく対応が求められると考える。園児はほとんど白紙の状態で障がい児に接するので、戸惑いが大きく誤解も出てくるものと思われる。また、保育者をはじめ周りの大人たちの態度が影響を与える⁵ことが多いものと思われるので、園児自身にも保護者にも障がいと障がい児についてどのように考えていったらよいのか参考になるものがあればよいと思われる。筆者の研究している「障がい理解のための絵本」がそのようなツールの一つになれば幸いと考え努力を重ねていきたいと思う。

引用文献

- 1 山中冴子（2008）障害者権利条約における教育条項. 音声言語医学（49），126-131
- 2 http://www8.cao.go.jp/shougai/whitepaper/h19hakusho/zenbun/zuhyo/zh1_32.html
- 3 鯨岡峻+安来市公立保育所保育士会編（2005）障碍児保育・30年. 京都：ミネルヴァ書房.
- 4 平成19年度障害者白書平成19年度版：<http://www8.cao.go.jp/shougai/whitepaper/h19hakusho/zenbun/zuhyo/index.html>
- 5 Donaldson, Joy（1980）Changing Attitudes Toward Handicapped Persons: A Review and Analysis of Research ,Exceptional Children Vol.46, No 7, 9-14.
- 6 山本哲也・桐原宏行・徳田克己（1997）絵本の読み聞かせによる障害理解教育. 日本保育学会大会発表論文抄録（50），1044-1045
- 7 前掲3. 208-214
- 8 平林あゆ子（2007）健常児の保護者へ説明をする場合の配慮と工夫. 七木田敦（編）障害児保育. 保育出版社. 170